

ひなぼと



～NPO法人ピピオ子どもセンター～

会報～
vol. 48

2026年6月8日

「ピピオの家」「はばたけ荘」について

私たちピピオ子どもセンターは、虐待や育児放棄など様々な事情でたちまち生活できる居場所がなくなり困難を抱えた概ね15歳から20歳の子どもたちに対し、安全で安心して過ごせる緊急避難場所を設け、その子に寄り添い権利擁護の観点に配慮しながら、その子の自立を支援していこうという活動をスタートし、2011年4月に子どもシェルター「ピピオの家」を、2014年9月に男子の自立援助ホーム「はばたけ荘」を開設し、この2つの施設の運営を柱に活動をしてまいりました。

この間、様々な困難を経験しましたが、様々な立場の多くの市民の皆様への支援や励ましに支えられ、活動を進めていくことができ、大変感謝しております。

ところで、子どもシェルター「ピピオの家」は、常勤職員の方の退職に伴う新たな職員1名の採用ができなくて、本年4月1日から休止しております。また、自立援助ホーム「はばたけ荘」も同様の状況で本年5月1日から休止しております。そして、現在、この2つの施設の常勤職員をして

いただける女性及び男性の方各1名の募集しているところでもあります。皆様の中で、ご関心のある方、あるいはご紹介いただける方がおられましたら、法人事務局（電話082-221-9563）にお問い合わせをいただければ幸いです。

また、求人情報については、広島県社会福祉人材育成センターの「福祉のお仕事」にも載せておりますので、よろしくお願いいたします。

私たちの活動はささやかな取り組みではありますが、一番寄り添ってくれるべき大人から放置され、また虐待され、自分など生まれて来なければよかったなどと思っている子どもらに、生まれてきてよかったんだ、一人ぼっちじゃない、自分の道は自分で選んでいいんだ、と思ってもらえるような取り組みをしていこうと思っています。

これからも、私どもの活動に暖かい目を向けていただければと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

理事長 鵜野一郎

会員の皆様へのご挨拶 平谷 優子

ピピオ子どもセンターは、皆さまのご支援のおかげで、今年で15周年を迎えます。15年というとピピオ子どもセンターがスタートしたころ生まれた子どもが、寝返りを打って⇒立ち上がり⇒言

葉を話せるようになり⇒ちょっとはしょって⇒反抗期と思春期を迎えて周囲を困らせちゃうくらいの長い年月ですが、過ぎてしまうと一瞬のできごとだったようであまり現実感がありません。

それでも私は50代を迎えてから体のあちこちにメンテナンスが必要となり、設立当初の30代のバイタリティも減っていて、そうした自分の体調を顧みることのできる流れを実感している今日この頃です。

そのような日常を送る私が、例によってある病院の待合室で待ち時間を過ごしていた際のことです。近くでは、小柄なお母さんが子どもたちに小声で声をかけながら、待ち時間を過ごしていました。母一人で子どもたちを静かに過ごさせるのはさぞ大変だろうと思って見守っていたのですが、みんな母の話をにこにこ聞いて、小さな子どもたちはとても朗らかに、でも、仲良く静かに過ごさせていました。そして、そんな子どもたちと楽しそうに過ごしているお母さんが印象的でした。「立派だなあ」と思いながら、私は持参していた書類を読み始めました。それからしばらくして、そのお母さんが私に声をかけてきました。最初は人違いでは？と思ったのですが、よくよく見るとそのお母さんは数年前にピピオを巣立ったAさんでした！！私は、うれしくなってひとしきりAさんや子どもたちのことを聞かせてもらいました。ピピオにいた当時、彼女は彼女に関わることにたいくさんの我慢をしてときに不安そうな表情を見せることもありましたが、この日の彼女は子どもたちとともに、あわただしく子どもたちのお世話をしながらも元気いっぱいの笑み

でした。私は、つかの間おばあちゃんになった気分分で彼女の子どもたちと遊ばせてもらい、診察の順番がきたので、「またね」とあいさつをしてお別れしました。

子どもシェルターピピオの家は、この15年の間にAさんをはじめ100人を超える子どもたちを受け入れ、彼女たちの心と体を調べて送り出してきました。入居前はさまざまにできごとからずいぶん荒れていた子どもたちも、ピピオの家では、暇だといいつつも落ち着いた顔を見せてくれます。彼女たちにとって本当の意味でのシェルター（避難場所）としての機能を担えていることを自負しています。

今年度に入ってから人員確保がままならず、ピピオの家も、また、はばたけ荘もやむを得ず休止とさせていただいています。両施設を必要とする子どもたちはきっと居ると思われる中、本当に心苦しく思います。もし皆さまや皆さまのお知り合いに、ピピオの窮状に手を貸してもよいと思ったださる、ピピオのスタッフとして働きたいと思ったださる方がいらっしゃいましたら、ぜひご一報ください。皆さんと一緒に準備し設立したピピオ子どもセンターを、今一度再開するお力をお貸しいただけますとうれしいです。

理事 平谷 優子

こどもの日記念シンポジウム 2026 のご報告

令和8年4月26日（日）広島市青少年センターで、広島弁護士会が主催するこどもの日記念シンポジウム2026「あなたには何ができますか？～身近に迫る10代のオーバードーズ（OD）と薬物乱用～」が開催されましたので、ご報告します。

例年2部構成で行っており、第1部では、舟入、沼田、基町、市立広島商業高校の演劇部と弁護士らによる演劇「はばたけピピオ15 たちまち-in the rain-」、第2部では、「薬物にどう向き合うか、若者たちの本音」と題する広島市内の大学・高校生によるフリートークが行われました。

第1部の演劇では、大学生の律が、薬物乱用防止教室と題して、高校生に対して、薬物乱用はダメ、ゼッタイと講義をするシーンから始まります。

律は、無事授業を終えるのですが、どこかもやもやしている様子です。

話は進み、律の友人である凜がODをしてしまいます。律は、母に凜がODをしてしまったことを相談すると、母からは背負わないようにと注意を受けますが、納得がいかず母に反発します。

他方、授業を受けていた高校生の花はふとしたきっかけで違法な薬物を使用してしまいます。それを知ったクラスメイトの力は花に対してどのように接すべきか悩みます。



本作は、薬物の危険性を知るとともに、身近な人が薬物乱用をしていたときにどういった行動をとるべきなののかについて考えるストーリーとなっています。

明確な答えの出ない問いですが、そのヒントになるような私が好きな劇中の台詞があります。「薬物を辞めさせる言葉はない。あるのは救われる言葉だけだ。」という台詞です。

本人にとってきっと薬物はやめた方がよい。しかし、周囲の人たちが、「薬物をやめなさい」「薬物をやめてくれたらうれしい」「薬物をやめないならもう知らない」という言葉をかけることが薬物をやめるために有効な言葉では必ずしもないのかもしれない。薬物を辞めてほしいと言われることが薬物を使用している人にとってはストレスになり、結果薬物を使用してしまうことにつながるのかもしれない。むしろ、薬物を使用したことをただ「そっか」と受け止め、そばにいて気持ち救われることもある、そして、気持ちが救われることで今日は薬物を使用しなくても大丈夫だと、薬物を使用しないことにつながるということがあるのだろうと思います。そのようなことを考えさせられる劇でした。

第2部では、劇にかかわった高校生と実際に高校などで薬物乱用防止教室の講師を行っている大学生らを交えたフリートークが行われました。

高校生は今回の劇を通じて、大学生はこれまでの薬物乱用防止を通じて、薬物の危険性や薬物を使用してしまう人たちのことを色々と考えて取り組んできたのだらうと思います。印象に残ったのが、高校生からの「違法薬物の使用は違法な行為なので法律で適正に処罰されなければならないという思いはあるが、処罰すれば解決するという問題でもないと考えようになった」という発言でした。違法行為は行ってはいけないという意識を持つことと、違法行為をおこなう人への理解は、高校生にとっては一見背反する視点に思えたのではないかと思います。今回の劇を通じて、薬物乱用をしてしまう人の背景の思いを馳せて、新たな視点を持ってもらえたのではないかと嬉しく感じています。

コロナ禍以後年々活気を取り戻してきた劇団ピピオ。来年もきっと今年以上にパワフルになって戻ってくると思います。来年も是非ご来場いただけると幸いです。

弁護士 川崎 浩介



スタッフ通信

はばたけ荘スタッフのOです。

現在、はばたけ荘と子どもシェルターは常勤職員の欠員により休止しています。休止中の職員は何をしているかといえば、直近の退居者たちが置いていった荷物の片付けや、退居後のアフターケア—具体的には学校・役所への手続きへの同行や生活用品の買い物—を行っています。退居した子ども達の部屋を掃除していると、きれいになっていく喜びと同時に、その子どもの生活の痕跡が消えていくような寂しさも覚えます。

さて、今回ははばたけ荘が運営を開始した2014年頃から現在までを比較して、約10年で子ども達を取り巻く環境がどのように変わったかを振り返ってみようと思います。

まず真っ先に挙げたいのはスマートフォンです。2014年当時の統計によると20代以下のスマホ普及率は80%を超えており、日本の総人口比で見ると約半数がスマートフォン、残りがフィーチャーフォン（いわゆるガラケー）でした。すでに充分普及していたわけです。当時の主な使われ方は電

話・SNS・ゲームでしたが、2019年頃からキャッシュレス決済端末としての利用が急速に広まりました。そのころから子ども達の金銭トラブルも増えてきたように感じています。最近では未成年でも後払い決済ができるサービスがあり、督促状がはばたけ荘に届くことも珍しくありません。マイナンバーなど身分証との連携も進み、スマートフォンは若年層にとってなくてはならない生活インフラになっています。そして最近、世間を騒がせているAIツールも子ども達の身近なものになってきました。支援者側も新しい技術の使い方を学びながら、子ども達に還元していきたいですね。

SNSの使い方にも変化があります。2014年当時の中高校生は、幼少期にはまだSNSが普及していなかったため「見たい時に見る、使いたい時に使う」という印象でした。一方、現在の中高校生は物心

がついたころからSNSが当たり前の環境で育っているため、「常に誰かとつながっている」という印象を受けます。友達と通話しながらそのままスタッフに話しかけてきたり、寝ている間も通話を切らない入居者を目にすることも増えました。そのこと自体を否定したいわけではありませんが、一人でゆっくり過ごす時間がないことは、筆者には少し落ち着かなく映ります。コロナウイルス禍で対面でなかなか会えない時期が続いたことも、影響しているかもしれません。

もちろん、この10年で変わったことは他にもたくさんあります。読んでいる皆様も「そういえばスーパーのポイントカードもすっかりアプリになったな」といった具合に、身近な変化をぜひ振り返ってみてください。はばたけ荘もこの休止期間中に、子ども達と環境の変化についていけるよう、しっかり準備を進めてまいります。

ボランティアスタッフ養成講座の延期について

当センターでは、毎年度、「ピピオの家」「はばたけ荘」の運営にご協力いただくボランティアスタッフを募集しており、6月から7月の間に「ボランティアスタッフ養成講座」を開催しています

が、今年度は、「ピピオの家」「はばたけ荘」の運営再開時期を目途として延期することとしました。具体的なスケジュールが決まりましたら、ホームページ、新聞掲載などによりお知らせします。

ピピオ掲示板

寄付等のご協力 ありがとうございます

高橋様、樽馬様、片木様などから寄付金等をいただいております。日々子どもたちの生活や、より充実した自立支援のために活用させていただきます。
この場を借りて御礼申し上げます。

発行者 特定非営利活動法人ピピオ子どもセンター 事務局
〒730-0012 広島市中区上八丁堀7番10号 HSビル404号室

TEL: 082-221-9563 FAX: 082-555-3659

ホームページ: <http://www.pipio.or.jp>